

2012. 7. 30.

発達障害への理解と共存

全学教育機構
村久保 雅孝

1. プロローグ:余話

- ・パワポを使わないのは・・・
- ・人は自分に都合のよい情報に親しむ

2. スペクトラムとしての発達障害理解

- ・特別支援教育の対象としての発達障害
- ・スペクトラムとしての理解:不便さや障害のグラデーション
- ・知的遅れを伴わない発達障害 → 軽度発達障害という用語は使わない
学術用語と行政で使用する用語は一致しない
大阪維新の会の無理解

3. 共存する発達障害

- ・高学歴かつ専門職につく発達障害的パーソナリティ
- ・アスペルガー障害当事者の「分からなさ」について → 物理的距離感への困難
英語が分からない英語翻訳職
- ・日常の対人行動の理解と発達障害者の困難
 - 1) 思い込みの点検
 - 2) ガーフィンケル(エスノメソロジーを開発)の違背実験と背後期待⇒日常会話(行動)が自然に支障なく「当たり前」に進行するのは、説明を要しない常識的な解釈ないし類型が共有されている、もしくは相互に理解されているということが前提となる。
⇒アスペルガー障害の人は、小の「常識的な解釈」に困難があるようである。
⇒発達障害におけるコミュニケーション障害の再検討

4. 安定した共存のために

- ・身近な仲間・上司・部下の理解しがたい違和感のある人：何故そのようにするのだろうか??
⇒ちょっとヘン／なんだか困る／対応に苦慮する／等
- ・自分のこと(自己理解)としてのこうした側面
- ・発達障害的傾向としての理解と自覚
- ・共存は相互関係なので一方のみが配慮・努力するのではない
⇒綾屋・熊谷「発達障害当事者研究」

以上